

2008, 11, 10

世界が尊敬した日本人(35)

## 南極探検に独力で挑んだ冒険家・白瀬 矗

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

今、起業家やベンチャーの育成が叫ばれているが、冒険家とそのアドベンチャー精神こそが未知なるフロンティア、新しい社会を切り開く原動力なのである。

発展途上にあつた明治日本で、西欧列強の極地探検家に伍して、独力で南極に挑んだ約1世紀前の白瀬矗の冒険こそ現代人に大きな勇気と感動を与える。



白瀬矗は文久元年(一八六一)6月、出羽国由利郡(現・秋田県にかほ市)の寺の長男に生まれた。

野山を駆け回るワパク坊主として成長、8歳の時、蘭学塾に入り、コロンブス、マゼランら探検家の話を聞いて胸躍らせ、英国の北極探検家・フランクリンにあこがれた。

この時、先生から聞いた「お湯、お酒、お茶、タバコはのまない。寒中でも火に当たらない」の5つの誓いを実行し、極地探検家を志した白瀬はこの極地心得を生涯にわって実践しており、彼の不屈の意志を示している。

明治12年、18歳で上京、陸軍軍人となり、伍長となって退役し、明治26年、千島探検隊(隊長・郡司成忠大尉)に参加して、探検家への第一歩を記した。

この時は探検隊員のうち10人が寒さと飢えで死亡するなど過酷な環境の中を生き延びた。当時、西欧列強の北極、南極の一番乗りの競争が激しくなっていた。

明治42年(1909)、米国のピアリーが北極探検に成功との報に驚いた白瀬は南極探検に方針を転換。国の援助をあおぐ一方、探検隊を組織した。一般から隊員を募集、大隈重信が後援会長となり、全国から寄付金4万5千円が集まった。

明治43年11月28日、東京芝浦港から南極探検船『開南丸』(204トン、乗組員27人)は出航した。漁船を改造した3本マストの木造帆船で蒸気機関18馬力。英国が支援したスコット隊の4分の1というちっぽけな船で、2万キロ先の南極へ。

シドニーに立ち寄り、準備しなおして明治45年(1912)1月に南極大陸に上陸した。

1月20日、犬ぞり2台で装備、食糧を積み15頭のアイヌ犬に引かせ、隊員5人が南極点を目指した。しかし、すでに約1ヵ月前にノルウェーのアムンゼン隊が南極点に到達していた。

21日にはスコット隊も到達したが、帰途に全員凍死するという悲劇を起こっていたが、そんなことはつゆ知らず、白瀬隊は勇躍向かった。

しかし、酷寒のマイナス30度、猛烈なブリザード(吹雪)で1日5キロも進めない。1月28日に隊員の疲労困憊と帰途の残り少なくなった食糧を考えて撤退を決意し、南緯80度05分、西経115度11分の地点に協力者一万人の名簿の箱を埋め日章旗を立て『大和雪原』と命名した。

極点踏破よりも、全員無事に帰還することを選択した勇氣ある決断をしたのである。

大正元年(1912)六月二十日、「開南丸」は芝浦に帰国、大歓迎を受けた。



シドニーの新聞は「船の設備は、どの探検隊よりも貧弱だったが、旅の苦難を恐れなかった」と賞賛し、イギリス地学協会も「白瀬の探検隊は経験がないところからはじめて、立派にやり遂げた」と高く評価した。

ところで、帰国した「南極の英雄」白瀬を待っていたものは数万円という膨大な探検費用の借金だけだった。

家、財産を売り払い、娘とフィルムを抱えて全国、朝鮮、満州までを講演会に駆け回り、借金を少しずつ返済していった。

このため晩年は貧乏のどん底に陥った。昭和二十年、郷里の秋田から娘の住む愛知県豊田市に転居し、日記に「困りけり、ああ困りけり、生活難に困りけるかな」と書いている。

二十一年九月四日、『我れ無くも、必ず探せ南極の、地中の宝、世にだすまで』の辞世を残して餓死していたのである。



享年85歳。

貧乏のため、葬式も出せない夫人は遺骨を抱いて移り住み、間もなく夫のあとを追った。